

合唱団との出会い

くしもすわを終の住処とするく



星が丘 岩佐 とし子

三十五年前、思いがけず下諏訪町に移り住んだ時は、主人も私もいずれは生まれ育った町に戻ろうと思っていました。音楽(器楽)や友人達と忙しい日々を送っていましたので、下諏訪町に住むということに特にこだわってはいませんでした。

合唱団との出会い
何年か経たある日、合唱団を作りたいたいという一本の電話をいただきました。その日から私の

生活の中に合唱というものが入ってきました。そして素晴らしいメンバーとの出会いが、私を下諏訪町に居座らせてしまいました。

合唱団は第八回定期演奏会を無事終え、今は次の目標に向かって練習が始まっております。つい先日スタートしたと思っていましたのに、もう十六年も経ったのだと思うと感慨深いものがあります。この十六年は私にとって、たくさん曲を練習し、作品として仕上げてきた貴重な期間でした。

ちよつと疲れた日も、文化センターに自然に足が向きます。保坂先生のご指導のもとに、運動と発声練習をして歌の練習に入ります。

歌いあげる楽しさ

しもすわ混声合唱団の曲目構成は、ミサ曲・ポピュラーな曲・組曲と三部構成で行っております。最初は耳慣れないミサ曲に戸惑いましたが、今はさわやかな感動を感じながら心の深みに触れようと歌っております。組曲は、作詩・作曲家の思いが入った大きな作品で、それぞれに難曲ながら歌いあげる楽しさがあります。楽しい曲も入れながらの練習が終わると、皆さん笑顔で家に帰ります。大きな声で思いきり歌うこと、ピアノシモでささやくように歌うこと、何気なく歌っている曲も作詩・作

曲家の思いに触れると、また違う歌のように感じられます。保坂先生のご指導によって、歌うことの楽しさ、難しさ、美しさ、そして深さを掘り起こされ、再び難曲に取り組もうという勇気と気力をいただいております。歌うことはもちろん、メンバーとの触れ合いを大切にしながら、できるだけ長く、しもすわ混声合唱団に居させていたいただきたいと思っております。

この地を終の住処として

下諏訪町には、歴史があり、文学があり、温泉があり、それによって生まれる数々の出会いがあります。この地を終の住処とさせてくれた、合唱団や温かな下諏訪町の友人たちに感謝しております。

俳句で風土を詠う



地元にしつかりと根を張っている俳句結社「夏廬会」があります。水月公園の登り口に句碑が建っています。

みちのべや早苗おかれしあと濡れて
菱城

俳句誌「夏廬」は、鳥取県境港から闘病のために諏訪に定住した中学校教師、木村蕪城とその仲間により、昭和十七年に創刊、戦争を経て現在七百二十号を数えます。

夏廬会では毎年、下諏訪図書館まつりに子ども俳句教室を開き、子どもの感性豊かな個性あふれる作品を短冊に書いて、七夕竹に飾っています。

西弥生町 竹沢 和昭

夏期鍛錬会にて

六月の夏期鍛錬会には、世界遺産の平等院を中心に、王朝貴族の世を偲び、二日間の楽しいひとときを過ごしました。また宇治川の鵜飼も楽しむことができました。

宇治川の荒き流れに涼みけり
舷打って女鵜匠の見目よかれ
青鷺のつんとこちらを見てをりぬ
再会は梅雨の相合ひ傘の内
道元の坂はゆるやか滴れり
大童

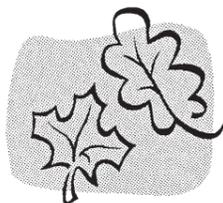
ふだんの吟行は顔見知りどうして気楽に楽しく気分転換を図ることができそうですが、鍛錬会ともなると、全国から気合いを入れた面々が集まるため、旧交を

温めつつも程良い緊張感とライバル意識も働き、あつと驚く作品に出合うこともできます。源氏物語の宇治十帖を読み、下調べオナーケーと勇んで出かけた私ですが、あまり役には立ちませんでした。風土に浸って風土を詠う。やはり五感を働かせて写生に徹することが、大切のようです。そのうえで、人生観や平安時代の華やかな匂いが少しでも表現できたらすばらしいと思います。

句会の楽しさ

主宰や互選によって採られなかった作品でも、「簡単には捨てずに、あとでもう一度冷静になつて作り直してみる」というのが会の方針であり、私も大切にしていることです。思いがけずに、よい作品ができることもあります。

また、俳人の中には様々なキヤリアの方がおり、それらの人たちからいろいろな知識を得たり生き方を学んだりすることもできます。



季節感と俳句
俳句は季節感が命です。「歳時記は、日本人の感覚のインデックス(索引)である」とは、詩人の寺田寅彦の言葉です。座右に置いておくと、暦の代わりにもなり、四季の移り変わりが一目瞭然でわかります。

梶の葉にびんびんころり願ひけり
草間時彦

諏訪大社の神紋「梶の葉」は、古くは七夕の日に、梶の葉に和歌を書く習慣があったと聞きます。人生を達観した句に出合いました。最近の心に残った一句です。
(雅号 大童)